

木村 一貫

撮った写真をその場で確認できるのが「デジカメ」の利点です。「フィルム」が当たり前だった頃はそうはいきませんでした。現像に出し、上がったプリントをみたら何も写っていないかった、などという笑いえない失敗談も結構ありました。

ロール状のフィルムは、シャッターを切った順に映像を物理的に記録する媒体です。たとえ気に入らないカットがあっても、それは現像してみなければわかりません。削除しようにもハサミで切るしかないのですが、ただ、歴史資料としてみると様々な可能性が眠っているように思います。特に、撮影時間の連続性は重要な要素です。現場でのカメラマンの意図や行動が浮かび上がってくるからです。では、フィルム全体の流れの中にどのような発見があるでしょうか。この展覧会は、写真を一枚の映像としてではなく、連続する「群」として読み解く手がかりを紹介します。

出品する写真は、すべて新潟の写真家、小林新一によるものです。小林は報道写真の分野で活躍した社会派のフォト・ジャーナリストでした。特に、デビュー時期にあたる昭和三十年代は、新潟で大火(昭和三十)や地盤沈下(昭和三十年前半)、大地震(昭和三十九)といった災害が立て

続けに起きた時代でした。小林は、そうした新潟の姿を『アサヒグラフ』『中央公論』『文藝春秋』などで報じてきたのです。

報道カメラマンは、スタジオ撮影とは違う動きをします。予期し得ない出来事に軸足を置いていくからです。それゆえフィルムには、撮影者だけが知る現場の事情が刻印されていることがあります。

たとえば下の写真(図1)をみてみましょう。昭和三十年一月、西船見町で高潮の被害を受けた住民たちが、危険が迫る家屋を取り壊し、土のうを積んでいる様子が写されています。

この中で小林は、子守りをする少年の写真(図2)を選び、発表したことがありません。海岸を背に「逃げる」姿を、少年に象徴させたのでしょうか。しかし前後のコマを通して見ると、大人たちの深刻さとは対照的に、まだ状況が飲み込めていない子どもたちは、案外無邪気だったようです(図3)。

一枚を選ぶことは、表現の意図を限定することに他なりません。ときにその限定された一枚の前後から現場の意外な側面がみえてくる場合があります。想像力と推理力を働かせて、「選ばれなかったカット」から半世紀前の新潟に思いを馳せてみてください。

(きむら ひとやす 学芸員)



図1



図2(図1の下段左から3枚目)

図3(図1の下段左から2枚目)

常設展示室から 肥前焼の骨壺

江戸時代が考古学の対象という不思議な感じがするかもしれません。考古学の発掘調査対象は長らく古代以前が中心でしたが、1970年代以降になって東京都の江戸城下町関係の遺跡などが発掘され、次第に、より新しい時代に調査対象が広がっていったという経緯があります。

新潟市でも近年、江戸時代の遺跡が相次いで発掘されています。その代表的なものが「近世新潟町跡」です。「近世新潟町跡」は明暦元(1655)年に現在地へ移転した新潟町の遺跡です。現在の町に重なっている遺跡なものにも関わらず意外に遺構が残っており、国道の拡幅やビル建設などに伴い江戸時代の町屋跡などが発掘されています。

昨年12月、常設展示室の展示替えて登場した骨壺は新潟町の寺院跡から出土したものです。この骨壺は火葬された遺骨が入った状態で見つかりました。また専門家によって、この骨壺は肥前焼という

現在の佐賀県唐津市付近で作成された陶磁器で、18世紀ころのものであると考えられています。

肥前焼が遠く九州から運ばれてきたことは興味深いですが、視野を新潟町から広げてみると昭和55(1980)年に発掘された西蒲区の旧巻町角海浜の坊々入墳墓でも肥前焼の骨壺が出土しています。また北陸地方の日本海沿岸の遺跡からは江戸時代の肥前焼が広く出土することがわかっています。肥前焼を購入してきた人がどれくらいの経済力を持っていたか、残念ながら詳しくはわかりません。ただ、各地で出土するだけあって肥前焼が日本海を活発に行き来していたことは確かでしょう。

最後に考古学の成果について強調しておかなければなりません。肥前焼が新潟町へも取引されていたことは発掘事例の積み重ねで初めてわかってきたことでした。江戸時代の研究に、古文書的手法に加えてこうした考古学の成果を取り込んでいくことで新しい知見を得ることができるのです。

田嶋 悠佑(たじま ゆうすけ 学芸員)



骨壺の出土状況



肥前焼の骨壺

おすすめの一冊

新旧地形図で見る新潟県の百年 明治〜平成の変貌

近代日本における本格的な地形図の作成は明治十八年に始まります。当初の計画では縮尺二万分の一での製作でしたが、明治二十三年に縮尺五万分の一に変更されました。大正期には日本全域をほぼ網羅しました。新潟市域は明治四十四年に測量され、翌年に発行されています。

本書は、新潟県下五一の地域を対象に、明治・大正期に測量・発行された五万分の一の地形図と最新の地形図を比較し、地域の特徴や地域の変化が一目で分かるように編集されています。併せて、地域の概要と産業などの特徴を文章で紹介しています。

現新潟市域では、豊栄・亀田郷・新津・白根・新潟など一〇のエリアが取り上げられています。新旧地形図を見比べると、市街地のひろがりや高速道路やバイパスの整備などの大きな変化はもろろのこと、日々の暮らしの中でふと疑問に思う、「集落の中を通る、曲がりくねった道路のなぜ?」や「宅地の広がり方」などを考えるヒントが浮かんでいきます。

新旧二枚の地形図から、一〇〇年の変化の理由を推理してみませんか。

(監野 かおり 学芸員)



鈴木郁夫・赤羽孝之(編)
新潟日報事業社
平成22(2010)年